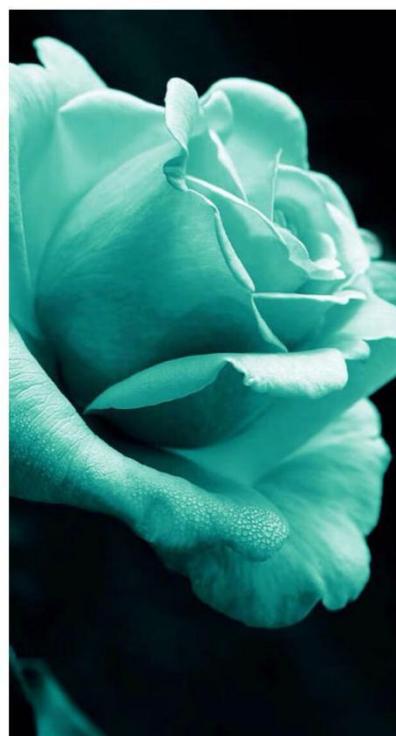


愛は不思議な



方程式

すみくらまりこ詩集

目 次

- 羅針盤 11
日時計 12
月の入江 13
雪の聖母（さんたまりあ） 14
林檎（まさん）の果実（み） 15
ぎやまん 17
クローバー 18
学問所（あかでみあ） 19
恋の坂 21
罪ある女（ひと） 22
楽園（ぱらいぞ） 23
礼拝所（かべら） 24
魂（あにま） 25
戻り橋 26
麵麺（ぱん） 27
数珠（ろざりお） 28
観音（まりあ）さま 29
如雨露（じょうろ） 30
更紗（さらさ） 31
さぼん 32
金平糖（こんふえいとす） 33

- 暁 (あうろら) 34
文 (かるた) 35
祷り (いのり) 36
小柄 (こづか) 37
刺繡師の恋 38
桜の夜 39
ロカ岬 40
光跡 41
白瑠璃の道 42
遅桜 43
紙の女神 44
千歳の乙女 46
水晶の乙女 47
ブルーモルフォ 49
虫たちの涙 50
透けた蝶 51
無憂樹の花 52
詩の花 53
古都の女 54
オオミズアオ 55
モナルカ蝶の旅 56
伝書鳩 57
花の姉妹—エオスとセレーネ— 60

星の乙女——アストライア—— 63

ムーサの歌 65

怒りの女神——エリス—— 68

海の女神——アンピトリテ—— 71

カリテスの歌——美女の命—— 73

運命の輪——テュケー—— 75

美しき砲撃——現代のアマゾネス 77

ネメシス——復讐の女神 79

アテーナーの鳥 80

アンドロメダ—— 81

ヘカテ—— 82

ホーライ 83

メリッサ 84

運命の三姉妹——モイライ 85

レア—— 86

黒衣の女神——レート—— 87

女神の背 89

香油壺 90

神殿 89

水中の女神たち 89

水中の獅子 89

ムーサの寄合 91

愛は不思議な方程式 94

- ヴァレリーの夜 95
夜間飛行 96
グランブルー 98
ミントブルーローズ 99
金の蛇 101
詩の蜜酒 103
美しい陰謀 105
楼蘭の砂を風が欲しがる 106
無言の贊歌 107
恋の化石 108
心の断面 109
青鷺の旅 111
愛の形象 113
わたしの声 115
グランド・レター 117
青女の慰め 119
大きい捷 120
氷河 122
砂の滝 123
縁起 124
テレポーテーション 125
奇数の女 127
虚ろな詩 129

- 黒い馬と白い馬 130
詩曲一森 131
心の包帯 136
心の洞 137
水中魔術館 138
天の川 143
入眠 144
嫉妬 146
ノスタルジア 147
サバンナの夜 149
迷路 150
うたのふね 151
アズレウス -Azureocereus- 152
黒いアイリス 153
黙契 156
鉄の愛 158
春になれば 160
小さな砦 161
黄金の繭 164
蘭の誇り 167
桜の夜 168
星雲の姿 170
白い本棚 171

- 般若の面 172
禁断の愛 175
幼きものに 177
水の琴 178
フラクタルの花 180
野生を忘れるな 182
青琥珀 184
綴る 186
冷ややかな愛 187
消えた女 188
頷き 189
消えた的 190
散る桜に 191
春の意志 192
春霞み 194
雪柳 195
三日月の恋 197
時の流れは 198
鳥の歌 200
こころの歌 201
花の歌 203
金魚の祈り 205
バッティラの夢 206

クレイジー・シューズ 207

ビジョン・ボックス 209

宝物 211

聖母の涙 213

天の工房 215

遁走 217

悲しみのノスタルジア 218

福紙 219

によおぜえ かんのん 221

ノスタルジー・ショップ 223

パピルエ・ファブリーク 224

キベルネテス 225

瑠璃の寺 226

望み 228

あなたの景色 230

ムスクの男 231

セプテンバー・ムーン 232

花の真意 233

エクフラシス 234

テクネ 235

細香の道 236

蘇鉄よ 238

冬の花 239

土漠 240
小さな舟 241
ムスクの男 243
生きた曲線 245
哀れな猫 246
わたしは花
中洲の人々
夢の荒神口
雲中の鶴
あなたへ
七つの子
月を盗る
泡消し遊び
氷魚の物語
獅子舞
鉄の匂い
ハゲワシ
楽屋裏
鉄の匂い
光るウェブ
増堀
ブックアート

すみくらまりこ詩集

愛は不思議な方程式

2015年～2019年作品集

羅針盤

不屈の意思で波を切りながら
大きな帆船が大海を
東へ東へひた走っていた

三年の航海に
羅針盤（こんぱす）が指すのは
東方の黄金国（じぱんぐ）

嵐の日は進まないし
風の日は方向（むき）が狂う
星の夜の不思議
帆船（ふね）が軽くなる

船長は水平線を見つめる
神父（ぱあどれ）は神に祈る

暗い船底（そこ）の水夫（あらくれ）は
漕ぐ動力の塊だ

水夫は命尽きるまで
ひたすらに漕ぐ。
神の御意志なり

三年の航海に
羅針盤が指すのは
東方の黄金国、日本

日時計

太陽が東から昇り
夕べには西へ沈む

昼には南中し
人は一息をつく
日中には
全身全霊で働く人々

刻まれた印に
影は時を指して動く

月の入江

横瀬浦に休む帆船を
月が煌々と照らしている
長旅に疲れた帆柱は
痛みの軋みに耐えている

立ち働く毛色の違う衆を
集落の人々は
怪人を見るように窺っている
やがて水、芋、野菜を運び受入れ

ばあどれ様のため
石橋を作り、
七段の階段を作り

対岸にはデウスさまの家
大きな門に四角の中庭
そして天に近づけるよう
尖った屋根が光らせた。

「愛は絶えることがない」

生きるのが辛いほどに
毎日の祈祷に救われて
人々は柔軟に暮らしていた

月の入江の帆船はいつぞや
出発してしまったけれども
神の慈愛が印されてあった。

雪の聖母（さんたまりあ）

一天上に還らんとする風花あり一沢木欣一

八月五日、此の地の民衆は奇蹟を忘れない

右腕に嬰児を抱いた聖母は

強くあらざるを得なかつた

独りの母か

天上から祝福の雪が舞う

愛の秘蹟に雪が舞う、

今年もまた、

白ばらはらはら、

御像の上に降る

林檎（まさん）の果実（み）

樂園は苦しみなどない
哀しみなどない
その種を持ち込まないから

それなのに
生命の木の隣に立つ
善惡の知識の木を選ぶとは

その金色の果実を
手に取るとは

えわは
香氣ただよい
甘さ滴る果汁を喜び
あだんは
えわの手から
果実を受け取り・・・

快樂（けらく）の味を
知ってしまった
それ以来 でうすを怒らせ
裸で樂園（ぱらいそ）から追われ

愛を渴仰し
愛に断罪される男女となつた

悪いことと知り
悪を行う業を背負うえわ

良いことと知り
善を裏切る業を背負うあだん

秘密のなかの秘密
思い出のなかの思い出に
こころの良心が疼き
両手で顔を覆うこととなる

未来永劫 連綿と
それぞれの苦しみを
代価として贖うこととなる

ぎやまん

来客があると
上女中のお米（よね）が蔵から箱を出してくる
それを見るのが好きだった

何重にも被った薄紙の
なかには不思議なかたちの
透き通った容物があった。

お母（もう）さまは、「ぎやまん」だと
教えてくださった
お父（でい）さまは「渡来物」だと
教えてくださった

光に透かすと違う空の下
耳に当てるときわざわと
波の音がした

ぱあどれ様は
ある砂を融かしたら
透きとおって固まるのだと
教えてくださった

何よりも硬いのは
金剛石つまりぎやまん、
そのようにこころもあれ
と教えてくださった

クローバ (つめくさ)

—被爆堂クローバ柔し憩えとぞ一中島斌雄

わたしは

緑の硝子皿 (ぎやまん) よりも

なによりも

木箱が好き

クローバーの匂い

阿蘭陀 (オランダ) が好き

わたしは

緑の天鵞織 (ビロード) よりも

なによりも

ばあどれ様の声で聞く

みかえる様のお話が好き

わたしは

裏の河原に遊ぶ

この水は何処までいくの

神父様は広い海だと云われる。

海はどこまでも続いて

西へ西へ進むと

また戻ってくるのだと

おかしなことを云われる

だから枯れたクローバを

筏舟に乗せて浮かべたの

学問所（あかでみあ）

お父（でい）様は、お饅頭を下さるとき
五人の兄弟姉妹みなで分けなさいと
三つ下さった

みな半分に割って食べたら
半分余り、喧嘩になった

お父様はお怒りになり
「頭を使え、よく考えろ」と
上の兄さまに仰った

次の日のこと

兄様は小刀を使い
変な形のお饅頭を三人に
三角切れ三つを二人に分けた

学問書のばあどれ様に教えてもらった
割算というものだと云われた
そこでは月星の動きも教えてもらえると
得意げに云われた

お父（でい）様は笑顔で
「よいことは真似でもせよ、悪いことは真似でも
してはならぬ」と皆に云われた。

お饅頭の変ななかたち
でもみな同じ大きさという

これ以来、力ずくの分捕り合戦はなくなった

恋の坂

彼のひとは
家を捨てた
わたしも
こころしていた

ふたり居れば
洞窟ですら
幸せな住処だと

でも
彼のひとは
わたしを
つなぎ止めなかつた

祝福も
喝采もなく
行きくれて
終の坂

互いの鼓動を
ひたと重ねて
見送る

遂に
点となり
消えてゆく

罪ある女（ひと）

ルカ傳七章四十七節

—この故に我なんぢに告ぐ、
この女の多くの罪は赦されり。
その愛すること大なればなり。—

ばあどれ様は悲しむ

きおとにも春を売る女がいる
いつの世も、何処も、春は売り物

「うつむく女よ、
罪は女だけが背負うものではない
そなたは、
すでに、
生きることで贖っているではないか

でうす様を慕う女（ひと）よ
こころから一人を愛せ

でうす様を信じよ
そうすれば、
喜びに身を震わせる朝が来る。

ばあどれ様は傷心を抱き取り
去りゆく小さな背中に十字を切る

樂園（ぱらいそ）

甘い果実を

実らせて

木が繁る処

口に含めば

果汁したたり

力の素となる

手を伸ばせば

腹膨れて

飢えの悩みなく

時が止まる

雲が湧き

天水をもたらす

汝よ

われら

樂園（パライソ）で逢う

汝よ

われら

そのために今を堪える

樂園が

われらの本当の住処なり

礼拝所（カペラ）

木目も浮くほど磨きこんだ床に
咲きたての五島椿が飾られている
聖壇にはまりあ様がほほ笑んでおはす

さきごろの悩みが胸に重く垂れて
わたしは額づいて祈りつづけた
すると拝所の靈気に包まれてくる

*

帰るころには心持ち軽くなつて
つま先上がりの坂も苦にならない
見下ろせば穏やかな海が広がつている

魂（あにま）

かのひとと

たましいを

ちぎった

たれにも

はじるなと

いわれた

あのくいで

くらそようと

ちかった

だから

もう　ここに

あにまはない

戻り橋

今なら戻れると
人はいうけれど
ふり向きはしない

まだ許されると
人はいうけれど
受け容れはしない

橋の向こうには
光がだれにも
同じように差す

信じることの
できるひとが
そばにいる

後髪引かれても
橋の途中で
振り返りはしない

麺麪（ぱん）

団子でもなく、餅でもない

ふんわりと膨らんだ生地を

窯に入れると みるまに

香ばしい麺麪が焼きあがる

口に含むと 唾を吸い

噛むまでもなくほどけていく

ぱあどれ様は 長い祈りをお捧げになり

菜汁と一緒に 食べておられる

この麺麪には 神の祝福が

詰まっていると教えてくださる

天からの雨、地の養分、人の知恵

どれが欠けても収穫できないと

麺麪をよくよくみれば

優しさが泡のようを開いて

丸く固い皮のなかに咲いている

まるではぱあどれ様のようだ

数珠（ろざりお）

ぱあどれ様の御まなこは
優しくて吸い込まれてしまう

いつも目を細めて沖合いを
眺めておられるが

蝶が肩に止まっていれば
そっと木の葉に移される

ぱあどれ様から戴いた
この数珠は 先にクロスがついている

でうす様が その真ん中におられる
みんなの苦しみを一身に負っておられる

観音（まりあ）様

わたしは信じる
屹度観音（まりあ）様も
お苦しみあつたろう

別れの日
手に入る小さな御像を
かのひとは下さった

これを胸にすると
思い切り泣ける
こどものように

最期の日には
このまりあ様に
天上へ導かれゆくよろこび

如雨露（じょうろ）

ばあどれ様は、いつも
愛についてお話される
父も母も、愛で結ばれたと
教えてくださる
いろんな愛があるのだと
如雨露で水を注ぐように
天から降る雨、
優しく降る雨
手のひらで受けて
慈しまれないと感じた

更紗

ばあどれ様は、
更紗という布を
見せて下さった。
まんなかに花があり
四方八方に花びらや
蔓が巻き合い広がっていく
さらさ
さらさ
とつぶやくと
心が安らぐのだった

ざぼん

ある日のこと、拝所に
見なれない実がお供えされていた。
近づくと甘酸っぱい香りがした。
ばあどれ様にお尋ねすると
この皮はお薬にもなると
もちろん実は美味しいと
教えてくださった
この香りが天国には
満ちているのかしら
お尋ねしたかったけれど
できなかつた
だってばあどれ様は
これはお船で持ってきたものと
云われたから
天国は海の向こうではなく
空の上なのだもの

金平糖（こんふえいとす）

ばあどれ様は、
丸い小さな粒を
持っておられる。
それはとても大事なもの
薬にもなる甘いもの
こんふえいとすという
お殿様がお喜びだと
物知りな人が云っている
どんな味なんだろう
私はお腹が減るから
何でもうれしいけれど
こんふえいとすが
一度だけ食べてみたい

暁 (あうら)

夏の夜は短い
縫い物をしていると
すぐに空が白んでくる
夜の大王が
朝の女王に
空を譲るよう
威厳をもって
退いていく
両手を広げて
朝日を独り占める

文 (かるた)

あいゆへに

かきつくす

さしむけよ

たちどころ

なみうせめ

はひりふね

まえのほも

やそゑんで

おいぬるを

われら

愛ゆへに

書き尽くす

差し向けよ

たちどころ

波失せめ

入り船

前の帆も

耶蘇笑んで

追いぬるを

吾ら

祷り

あきのよる

ゆめふかし

こをだいて

そぼもおり

われらちゑ

まとみつと

むねにえん

くろすみせ

やそうぬへ

なさけ

秋の夜

夢深し

児を抱いて

祖母もおり

吾ら智恵

纏いつと

胸に得ん

十字架見せ

耶蘇 汝へ

愛 (なさけ)

小柄（こづか）

一町内に廻り張られた
婚儀を知らせる紅白の幕、
積まれた樽酒、祝い酒。

嫁ぐ朝、
父が娘に差し出すのは
操を守るかんざしと
命を決する小柄（こづか）。

青ざめて
迎えを待つ
白無垢、打掛、綿帽子。

花嫁は何も知らない。
婚儀の意味も
家長の意図も
子々孫々、
小柄が知るのみ。

刺繡師の恋

栄えと滅びを知り尽くした
円熟の水都ベネチアの
水路はレース模様

空中のステッチ（プント・イン・アリア）は
刺繡台の呪縛を離れ
自由な愛を求めすぎた

針一本と糸一本が
編み出す模様は
幾何学の恋心

白い糸は必ず結ばれて
底無しの海へと
繋がっているのだから

逢えないはずがない
線と線は結ばれて
安らぎの広場となる

互いに擦り寄る
二艘のゴンドラ
櫂の先の滴よ
不死の詩句となれ

桜の夜

桜が咲きそろえば
きまつて雨が降る
しばらくふり続く

愛を分かりあれば
きまつて不在の時が
横たわるよう

こんなに桜が
咲いてくれているのに
まして冷たい雨が
降っているというのに

どうして
どうして
わたしまで
安らかに眠れるだろう

夜をとおして
白映えの桜と語り合う
珈琲を沸かし
悲しい詩を訳す

ロカ岬

「ここに地終わり海始まる」

Onde a terra acaba e o mar começa

坂を登りつめると、道は突然に途切れる。そして切り立った断崖絶壁の向こうには空と海が広がっている。ユーラシア大陸の最東端ロシア・デジニョフ岬から最西端ロカ岬につづく人の道はここに断たれることになる。

人々の足はここで竦み、しばし佇んで己が場所へ戻る。しかし詩人は翼を持っている。大航海時代に船出した人々のように、決して後戻りはしない。生命が終わり魂命が始まるように、新しい道を探すのだ。

詩祭とは、そういうもの。詩人が集まり、ただ詩神を喜ばせ、別れていくものではない。それは終点ではない。翼を持つ詩人たちは、そこから詩の新大陸へ飛び込んでいく。互いに違うことを喜び、尊重するのだ。独り翔ける詩人を思いやりながら。

光跡

「はやぶさ」が元気に飛んでいる。羽ばたきもせず、息もせず、静かに目的の一点を目指している。それは「竜宮」。われらが星から巣立ったはやぶさは五年の旅をする。竜宮のお土産を手に戻ってくるまで一秒たりとも目を離さない人々に守られて。

暗い夜空に一筋の光の跡。使命を背に飛ぶはやぶさは温かい。太陽の光は、熱を与える続けるからだ。それを力に体躯はスウイングして、微妙に向きを変えている。暗いのは海の底だけではない、行く手の闇には羽を休める枝もない。

われわれも光を発して生きている。愛という光だ。そうしてわずか百年に満たない光跡を残して消えていく。しかし光の点滅は詩のなかに留まる。そして命の担い手たちは、過去の光を読むことができる。夜空に煌く命なき美しさを仰ぎながら。

竜宮：2015年に発見された小惑星の名前

竜宮のお土産：「竜宮」の表面のサンプルを採取し帰還することを「浦島太郎」の話になぞらえている。

白瑠璃の道

あをによし
奈良の京へ
白瑠璃よ
天竺を
とほってきたか

胡の人の
笛の音を込め
白瑠璃よ
天山を
越えてきたか

唐の人の
詩の音を封じ
白瑠璃よ
住之江津に
入ってきたか

古代のひとの
美しい謎を秘めて
白瑠璃よ
どの道を
とほってきたか

語れ
われらに
絹の道の
遙かな浪漫を

遅桜

三千本の桜が
ほぼ散り果てた
夜久野の山里にあって

かろうじて咲き残り
そよ風にさえ震える
花の房を見つけた

愛しもうとふれると
待っていたかのように
風と一緒に散っていった

わたしにも
このように散らした花が
あつたかもしれない

こころが
美しく痛んだ

紙の女神

若狭の国つ御神に、
ひとりの女神がおはした。

西域から瑞雲にのり
ようやく東端の島に
静謐なる地を見出されたか

あるとき、
しなびた乳にすがる赤子
その母の涙が涸れ果てたのを
見かねて、小声で囁かれた

「しっ、誰にも云うでないぞ」

「ミツマタなる木があろう
その皮を剥いで束にして
それを水につけよ」

「よくよく刻め、
よくよく茹でよ
よくよく混ぜよ」

正直な女子だった
子の食べ物と信じ
混ぜつづけていた

そして女神は
羽衣を枝にかけ

御手で紙を漉き給うた

「よく憶えておくべし
重しをかけて乾かして、
あとは知恵を尽くすべし」

すると
軽くて濡れても破れぬ
美しい紙が何枚もできた

女神のお告げは
ほかの誰でもなく
この母だけに授けられた

今年も春祭りだ
子供たちの明るい声が
町内に響き渡る

紙の女神は不老不死
御歳は千五百を数え
満悦の笑みを含みて

いまもって
岡太（おかもと）神社に
村の豊穣を守り給ふ

千歳の乙女

流れる黒髪束ねれば
掴みきれない命の弾性
手のひらに心地よく
結いあげる力を込める

襟ぬきの なで肩の
透きとおる肌の白さに
ともすれば襲われる
それは美しい眩暈

千々の思い襲ねて
氷色の清しさ
紅色の激しさ
刻々と映すは心花

ようやく鏡を手に
姿絵を見る
永久の乙女
京都

千の歳に
磨かれて
千の美が
今ここに

水晶の乙女

その山里に
生まれた乙女は
鉱山で働き続けて
老いていく

日が暮れるまで
重石を背中に
裾も肌蹴り
山道を往復する

男が掘る
原石にまじる
わずかな水晶
そのために

肩のすり傷
血がにじみ
乾き強くなる

黄水晶を
飾らずとも
豊かな乳房
揺れ揺れる

その姿は
水晶の中に
彫刻された
乙女観音か

廃鉱の跡を
探して歩く
男の手の中
自ら光りだす

ブルーモルフォ

わたしの心の奥には
濃い甘霧（ミスト）に包まれた
緑の楽園がある-

朽ちた倒木のうえに
樹が立ち上り
鳶が絡みのぼる。

苔が含んだ雨—
濁り河の源も
此処にある。

そして 美しいブルーモルフォが
生命を明滅させる

求めても求めても
哀しひの青藍翅（あおばね）は
ひらりひらり逃げていく

歩くには細すぎる肢（あし）
食むには細すぎる口
侵略者にに対し無防備な身体。

ここまで来るものはいない
ここに敵はいない
だからわたしのために生きておくれ

虫たちの涙

一日高敏隆先生の靈前に捧ぐ—

捕虫網で捕えても
じっと観察してから
放たれたる先生だった

地面に腹ばうように
ずっと同じ目線で
追われている先生だった

背広を着ていても
ずっと虫のループタイを
身に附いている先生だった

昆虫図鑑の監修に見つけた
お名前にまざまざと甦る日々
細くしなやかな指で
朱入れをされる先生だった

わたしも先生のよう
草の虫たちに話しかけ
答えを聞いてみた

すると
先生が恋しいと泣いた
虫たちがみんな泣いた

虫のいのちが万全なとき
人のいのちも保たれる

透けた蝶

たとえ力なくとも
無色の翅はどんな意匠よりも美しかった
月を透かしながら翅を立て
おまへは四肢で花の芯につかまっていた

もう、飛ぶことを諦めたのか
もう、仲間と語り合うのをやめたのか
まだ本当の歎びをしらない、と
空の果てまで行くのではなかったのか

透明になることは
全てから去りゆくこと
そして自らを明かした
おまへは詩人（うたびと）
ほんとうの詩人（うたびと）

無憂樹の花

葉は重なりあって 冷んやりと樹肌を和らげ
花は赤く染まって 華やかに樹枝を飾り
衆生の祈りを二千五百年も聴いて下さる
そんな無憂樹が印度にはあるという

その聖樹に集むる人々にまじって
生かせていただいていることに
感謝の祈りを捧げたいと呴けば
忙しない師走の風が走り抜けていく

無憂樹の花は
心の中に咲くのだ、と
ささやきながら。

詩の花

まだ指を輪にして握れるくらいの細い幹だった。鴨川の川端二条あたりに、この桜の植樹がされたのは、忘れもしない、1973年のこと。川堤の並木のうち、この木だけになぜか心を寄せた私だった。台風が来たときなどずいぶん心配したが、桜は健気に耐えてみせた。

次の春、ちらほら花をつけた。すぐに散らせる柔らかな花びらの初花だった。そうして葉脈の薄い青葉となり、浅い紅葉もきちんとめぐり、歳月を経て少しづつ大きくなった。この桜に話しかけた半世紀、傷心の日々もあった。寂しい日々が多かった。もちろん嬉しい日々も訪れては去っていった。

すでにこの桜は両腕に抱けるほど丈夫となった。春には桜の房を惜しげもなく咲かせる。晩秋には炎のように燃えて、潔く落葉する。どんな嵐でもびくともしない。わたしの歳月が年輪に染みこんでいる。そうしてこれからもずっと詩の花を咲かせていくのだ。

古都の女

その女は、いつも静かに歩いていた。市内を流れる丸太町橋を渡るとき、旅する夫の星巖を待つ妻の心を思い、三本木のあたりを歩くときには、山陽との叶わぬ恋を漢詩に綴る女の心を思った。

夜の散歩では荒神橋を眺めていた。橙色のランプは、暗い川面にいく筋も揺れていた。花火のようでもなく、送り火のようでもなく、いつでも穏やかな光を与えていたのだった。

朝の散歩では紫陽花を愛でていた。夢物語のような移ろい花を緑の丈夫な葉と木肌の枝が支えていた。無香の花の物語には立ち入るまい、出口を閉じた迷路であろう、とその女は通りすぎた。

その女は、じつは何も見ていなかった。心に映っていたのは、歪んだ硝子体に集めた光の束を破れた映写幕に投影した動く影だった。それゆえそれは色もなく、触れることのできない幻であった。

* 梁川紅蘭 梁川星巖の妻
** 江馬細香 賴山陽の弟子

オオミズアオ

澄んだ水が
浅く透けてみえる
そんな色のヴェールをまとい
おまへは羽化してきた

この世に
どんな美しさを
求めてきたというのだ
その波打つヴェールに
誰が敵うだろう

おずおずと飛ぶ蛾よ
そっと見守るひとを
忘れてはならない

モナルカ蝶の旅

一匹の蝶と侮るなかれ

薄羽の蝶と哀れむなかれ

この蝶は北米から旅をする

メキシコ、モレリアの森には

産卵のため一億匹が飛んでくる

ざわめき止まぬ群蝶の樹に

白じらと満月が差す

そうしてめでたく若い蝶が

むら雲のように故郷へ戻るとき

親蝶は森の土に果てる

蜜の木から蜜の木へ 川から川へ

この見事な飛行群団を見よ

群れを外れると明日がない

日ごとたくましさを増し

彼らは嬉々と北半球を我が物とする

一匹の蝶と侮るなかれ

薄羽の蝶と哀れむなかれ

伝書鳩

必ず飼い主のもとへ
戻るという鳩だから
戦場の空でも
ひるまない

狭い鳩小屋で
その日を待ち
いざという日に
伝令をはたす

その日
籠に入れられて
運ばれた戦場から
風をきって飛んだ

地上に比べ
空は静かだった
気流にも乗れ
安全な飛行だった

やがて穏やかに
緑なす郷土が
見えてきた
館が見えてきた

しかし
人の姿が見えない
迎えてくれる主人が

どこにもいない

鳩小屋に
降りたものの
あのにぎやかな
鳩仲間もいない

そのあたりを
うろつく鳩は
屋根のすきまに
眠りにつく

いつか
主人が戻ってくると
信じて待つ
伝令を渡すため

あなたが
その館を訪ねたら
屋根に向かって
叫んでほしい

「帰ったぞ—
伝令を持ってこい。
よくやった、
よくやった」と

鳩はその声を
待っている
主人だけを恋う

伝書鳩だから。

花の姉妹—エオスとセレーネ—

奔放な愛に生き
誰にも傳（かしづ）かない
赤いひまわりのような
妹だった

静かな愛に生き
誰にも思われる
白い月見草のような
姉だった

妹は男との恋に破れ
美しい男を求めていた
高価な車で連れ去り
自分のものとした

彼の不死を願った妹も
彼の不老を願わなかつた
すっかり年老いてきた恋人
すると部屋へ閉じ込めた

繰言をつぶやくばかり
泣言を叫ぶばかり
懺悔を絞るばかり
するといつしか蟬となつた

それが最初の男だった

夜明けになると

美しい男を誘いにいく妹
ばら色の爪は
いつも整えられていた

まるで暁の女神のように
サフラン色のガウンに
光と輝きをまとっていた
そして逞しい男をみつけた

狩りの得意な男だった
腕のなかで妹はうつとりとした
愛におごった彼は別の女に挑み
その女が放った蠍の毒で死んだ

それが二番目の男だった

情熱の衰えない妹は
新婚の床から男を奪い去る
彼は八年間離れていても
妻を慕い続ける男だった

これが三番目の男だった

静かな月見草の姉は
たったひとり美少年を愛した
その少年は愛に満たされて
毎日男らしくなっていく

妹の願いはただひとつ
このまま変わらずにいてほしい
この美しさを この寝顔が

わたしのものである限り

不老不死の願いは
聞き届けられた
それは生を止めること
丘のうえで永眠させること

姉は月の女神のように
日が暮れて、朝が来るまで
ずっとその寝顔を見て
優しく額を撫でるのだった

それは最初で最後の男だった

赤いひまわりの妹
白い月見草の姉
ふたりの愛の激しさと優しさは
恋人たちを凌駕したのだった

星の乙女——アストライア——

神々が地上にあり

人々と交わった

黄金の時代

ひとりの女神が

正義を説いた

人々は耳を傾けた

時代が移り

人々が貪欲になった

銀の時代

神々は地上を去り

天に帰っていった

そのときも

女神は最後まで

地上に残り

人々に訴えた

時代がなおも移り

人々が残酷になった

青銅の時代

女神は絶望し

心ある人々を残して

天に帰っていった

星の乙女は
空から鉄の時代を
見下ろしている

正義の天秤は
二つの皿で
量るものなのに

「いったい
幾つの正義が
あればいいの

もう人々が
好きなように
解決すれば？」

星の乙女は
哀れみの眼差しで
見下ろしている

ムーサの歌

大地ゼウスを父にもち
ムネモシュネーを母とする
九人のムーサは女神です

美声という名の
カリオペー¹
それは叙事詩の女神です
不老不死の神なれば
筆の勢い留まらず
英雄作り続けます

賛美という名の
クレイオは
それは歴史の女神です
不老不死の神なれば
巻物継いで物語り
今日の事も綴ります

歓喜という名の
エウテルペー²
それは詩歌の女神です
不老不死の神なれば
心から的好き詩には
糸（ほど）されては泣いてます

豊満という名の
タレイアは
それは悲劇の女神です

不老不死の神なれば
カタストロフィ時々に
仕立てて劇をつくります

歌手という名の
メルポメネー
それは挽歌の女神です
不老不死の神なれば
哀しい歌を選んでは
きれいな声で歌います

舞踏という名の
テルプシコラー
それは合唱の女神です
不老不死の神なれば
声をそろえてうつとりと
神々 賛美いたします

美女という名の
エラトーは
それは独唱の女神です
不老不死の神なれば
ばら色の笑みいつまでも
衰える事ありません

贊歌という名の
ポルムニア
それは贊美の女神です
不老不死の神なれば
人の善意や善行は
褒めてほうびを与えます

天女という名の
ウーラニア
それは天の女神です
不老不死の神なれば
コンパスもって天の上
あなたの位置を知らせます

九人のムーサが
揃うとき
それはそれば見事です

天変地異のないように
ムーサ達の平安を
大理石のお姿に
祈りを捧げるわたしです

怒りの女神—エリス—

怒りは
激情の裏返し
女神とて例外ではない

誇りを捨てて傳いて
真実を尽くした後に
裏切られた女神
その名はエリス

軍神を父にもち
夜の女神を母とする
血にまみれた鎧着て
真っ赤な炎の息を吐く

エリスの怒りは
世界を覆すように
からだは震え
声は一段高くなる

深紅のくちびるは
血の気をうしない
涼しいまなこは
血の気を帯びる

全ての神が
招かれる祝宴で
そこに呼ばれない
怒りが沸騰点に達する

なぜなら不和厳禁の
婚儀であったから
エリスは投付けたのは
「黄金の林檎」ひとつ

「もっとも美しい
女神にあげるわ」
かくて三女神の
争い生じて・・・

ヘーラー
アフロディティ
アテネー
それぞれが美を競う

判定を任された
羊飼いパリスの
懊惱はげしい
「パリスの審判」

かくて
それがもとで
トロイア戦争の
幕が切って落とされる

エリスは
三人息子を産み
それはポノス 労苦の神
レーテー 忘却の神、アルゴス 悲嘆の神

エリスは
ひとり娘を産み
それはそれで
混沌の女神にする

いま幸せな人々
いま平和な国々
少し慎んでいたほうが
この母娘の怒りは買わない

海の女神—アンピトリテ—

高々と
天に捧ぐ
血色の枝珊瑚
海の秘密を
開ける鍵

ポセイドンは
大地神
その誇りもて
冷たい女神を
諦めず追う

男神の怒りは
大地を震わせる
大神殿も崩し
海も割れるほど

地の果て
アトラスまで逃げる
女神を追いかけて
どこまでも探し出す

隠れ場所は
イルカが教えた
怖さと熱意に
女神は愛を受ける

ポセイドンが

欲したのは

海の優しさ

その深さ

ポセイドンが

愛したのは

白い砂を敷詰めた

エーゲ海の青の色

柔らかい藻は

揺れて眠る海

愛しき魚が

群れて遊ぶ海

アンピトリテに

美しい海を

すべて任せたい

安らぎを守りたい、と

かくて

ポセイドンと

アンピトリテは

息子トリトーンをもうけ・・・

いまも

荒れ狂う嵐も

青黒い瞳が

少し目配せすれば

厭いでくるという

カリテスの歌—美女の命—

カリスの女神は
あくまで明るい
始めのうちは
なにもかも
明るい

すべての者達は
愛することで
子を為して
その姿は
「花」

花盛りと呼ぶ
タレイアは
みるみる
衰えて
嘆く
「時」

喜びと呼ぶ
エウプロシュネー
恋の花が
今実る
「結」

輝く女と呼ぶ
アグライアー
恋の凱歌は

高々と

「天」

美女と呼ばれる

カレーの女神

老いても

なおも

美女

「優」

成長させる女

アウクソー

美の面を

剥いで

なお

「生」

カリテスの女神

美女の一生に

寄り添いつ

髪を梳り

囁くは

呪文

「命」

運命の輪—テュケ—

テュケの冠は

都市の城壁

あらゆる災いから

守りぬく女神

洪水も地震も

嵐も風雪も

人々の騒乱も

文化の破壊も

女神は退ける

都市に静穏を

秩序を、豊穣を

もたらすために

羊の角に

収穫物を

詰めての捧げ物

祈りは喜びの歌

女神とて

運命の輪は

動かさなければ

ならない

できるなら

正しい方向へ

明るい処へ

良き様に

女神の目は
不遜な人々の
わずかな不正も
見逃さない

美しい眼差しは
貧しい人々の
慎ましい暮らしに
注がれる

きょうも市街は
女神に守られ
静かに眠りに
落ちていく

美しき砲撃—現代のアマゾネス

女神アルテミスを
奉じた部族は
すべて女だった

男は他部族
強い遺伝子を求め
孕んで戻った

弓を引くため
きりとった
ひだりの乳房

生まれてくる
女児だけを
厳しく鍛えた

アマゾン川まで
追われても
意気は盛んだった

いま、
自由を求める
女が戦う時代

血は争えず
強い女の詩人
ここに集まれり

美しく静かに
打ちのめす
言葉の一撃

ネメシスー復讐の女神

その翼で
どこまでも
追いかけて
復讐を遂げた

その愛を
踏みにじった者へ
その愛を
己へ向けた者へ

ネメシスに
なかつたのは
容赦という
美しい徳

容れることは
己を無にすること
赦すことは
己を殺すこと

天に刃向う
驕った人間は
誰だ
どこだ

怒りの鉄を
熔かしつづける
女神の眼に
炎が立ちのぼる

アテーナーの梟

どの街も
完全なる自治を行い
互いを侵犯しない

どの街も
言論を戦わせ
暴力で屈服させない

どの街も
どこの力にも
決して屈服しない

そして
商いの流通と
繁盛が約束された

旅人は
地料理と地酒を
振舞われた

内圧を高め
外圧に負けない
梟の知恵

美しい守護神
アテーナーは
微笑んで見守っていた

アンドロメダー

エチオピア王の
王妃カシオペー
その娘アンドロメダー

「母は神々より美しい」、と
口にしたばかりに
怒りを買い捉えられた

岩に鎖で
くくりつけられ
苦しむ女神

たまたま通った
ペルセウスが
助けて救われたものの

天上の星に召され
いまでも星雲が
輝いている

ヘカテー

新月を守護する女神

闇にあっても

迷う人々を導く

月満ちて

月欠ける

その廻りにあって

女性は

あくまでも

守られねばならない

ヘカテーの

三面の顔に

迷いはない

ホーライ

タローは春の女神
アウクソーは夏の女神
カルポーは冬の女神

種を蒔き
生長し
実る

命の糧を
つかさどる
三姉妹—ホーライ

メリッサ

マケドニア
スコピエから
オフリドまでの道

土地の人が
道端で蜂蜜を
売っていた

車を止めて
色々尋ねる
詩友たち

今だから
この光景が
輝いて想い出せる

道端の花も
群がる蜂も
蜂蜜も——

何千年と
いのちを繋いで
生きている

蜂蜜の女神
メリッサが
守っているから

運命の三姉妹 モイライ

運命には
逆らってはいけない
川を遡り泳ぐこととなる

しかし
斜めに泳ぐことは
できるかもしれない

力を抜けば負けるし
力が尽きれば溺れる
時間は決められている

目的地は
定まっているか
どの灯かりを目指すのか

暗い川を
渡っていくのに
道連れはいるのか

運命の糸を操る
三姉妹すらも
その不安を顔に出す

ただ
女神の歌をたよりに
その方向へ泳げばいい

レアー

ガイアを母に
クレタ島で
ゼウスを生んだ
強い女神

夫クロノスから
子供を守り
育てあげた
気丈な女神

獅子を
脇にはべらせ
椅子にゆったりと
座っている

戦費を
土地に注げば
豊穣を
約束する女神

黒衣の女神 レートー

黒衣をまとう

優しい女神

その子供達は違う

うずらに変身した

ゼウスと交わり

子を生む

そのため

ほかの女神に

嫉妬をされてしまう

出産場所を

与えない策略に

苦しみアルテミスを生む

姉アルテミスに

手を引かれ

彷徨ったあげく

弟アポロンを生む

9日9晩の

難産に堪え

多くの女神たちに

見守られ無事に生む

空には

白鳥が舞った

という



女神の背

白蟻の背に
一筋の川
浅い砂には
静かに竜が
横たわる



香油壺

マケドニア遺跡から出土した香油壺のレプリカがここにある。ストルーガ詩祭で記念に頂いたものだ。そういえば、その地の土産品は、なぜか蝶の意匠が多かつた。どこへいっても蝶の形の民芸品が売ってある。レースであったり、金色に光っていたり、ネックレスになっていたり。それも遺跡から出土したという由来をもつと、後で知った。

神殿

文明の発祥は、神々を出現させた。治める最高権威にある人物を褒めるのも断罪するのも神であり、その前では王もひとりの人間であった。下々はさらに弱く、日々の糧すら神のご加護を祈った。神々は陽気だった。力は絶大で、空を統べ、海を統べ、地を統べた。神々を鎮め、安らいでいたための神殿は、なにより大切だった。土地を見下ろす高台に建てられた。

水中の女神たち

近年急速に発達した水中考古学という学問がある。海底探査機器の発達により、見つけられた水中遺跡には、息を呑むような光景があった。ある女神の背中は白蝶のように滑らかで、ひざを抱えている。ある像は、藻がメデューサの蛇のようにからみあい、壮絶な表情を見せている。人の手に触れなかつた幸運があった。宗教戦争の憎悪から、鼻をくじかれた聖像が多いなかで、それらの顔は、一点の欠けもなく、美しく水中に時を遊んでいたようだ。

水中の獅子

アレクサンドリアの水中遺跡で発見された、獅子の像は、いかにも生きているようだ。いや、筋肉の割れまで透ける精悍な雄の気高さ、ああなんと雄雄しい姿であることか。百獣の王は、海の底で二千年も没しながら、威厳を失わずにいたこ

とに言葉を失う。神々を守る使命は立派に果たしている。

ムーサの寄合

—地上では
争いが絶えず
もう限界です—

叫ぶような
声が天へ届き
ムーサたちの
心を動かしました

ローマからは
バラ色の肌をもつ
アウロラが
立ち上りました

ギリシャからは
雷を発明したという
アテネが
立ち上りました

日本からは
アマテラス
イタリアからは
プリマベーラが

どうやら
ムーサたちのことばは
通じ合っていると
みえました

そして
地上に降り
とある小島に
集まりました

それは珊瑚の島
天から愛でた
手つかずの
無人の島です

ムーサの美貌（かお）は
とげとげと
口を引き締め
青ざめています

ムーサは それぞれに
天秤をもっています
コンパスをもっています
弓矢をもっています

人間の行く末が
どうなるのか
知っているだけに
救いたいのです

三日三晩
寝ずに
話し合った後
うなずきあいました

濃い虹が
斜めから射して
天へ戻るとき
ムーサは言いました

—神に助けを求める女は
必ずや救いましょう
神を畏れない男は
必ずや罰を与えましょう—

愛は不思議な方程式

たとえ簡素な方程式であっても
ひとつの解があらねばならない

もし存在が
定数であれば
時と愛の深さは
係数となる

括弧で閉じられた左辺の
儚い夢や内なる相克
括弧で閉じられない右辺の
強い意志と不変の存在

なぜに両辺が等しいのか

やはり愛は不思議な方程式だ

ヴァレリーの夜

小雪が窓の外に舞っていた。
殺風景な部屋に戻ると
熱い珈琲が冷えた手を温めてくれた。

明日発つ人と詩人に時が無情に流れた
しかし大天使と小天使は止める術を知っていた。
本を取り出しヴァレリーの詩を読む天使たち

「夜の小オード」

ある声の影
たぶん わたしのが
魂のなかで おまえにとどく
どんなに わたしが 遠くても

「冬の窓ガラスに…」

愛こそもの悲しい形の秘密
不在が住む この影のうちに わたしはもはや待たない
自己の消失による事物の広大な消失以外のないものも

「沈黙」

今宵 わたしたちのあとには 大いなる沈黙しか残らない

あたかもヴァレリーの詩が
その祝祭の夜を導いたようだった。

天使たちは聖壇より詩を戴き、おもむろに読んだ。
そうして幸福のおおきな渦へ巻かれていった。

夜間飛行

—エレーヌ・ブーシェに捧ぐ—

眼下の街は

静かに瞬いている

家では親子が眠り

小屋では鶴や馬が眠り

草木は静かな息をしている

たったひとり空を

空と海の暗黒の境目を飛ぶ

夜三時。魔法瓶の珈琲をすすり

目を凝らして飛んでいる

頼れるものは計器だけ

空中のわが身の姿勢も

これなしには分からない

わたしは何も考えない

ブーン、ブーン、ブーン

プロペラの健やかな音を聞いている

やがて、東から偉大な太陽が昇る

雲を現わしながら 海を現わしながら

完璧に整備された機体を

操る幸せは誰にも譲れない

まもなく、夜間飛行は終わる

眼下の街は

新しい一日を始めている

グランブルー

無呼吸潜水で、
垂直に降りていくと
伝説の人にも限界がある

それでも記録を作った
一ミリでも深く
一秒でも長く

気を失いかけたとき
えもいわれぬ美しい青を
ぼくは見た

彼はそう呟いた
それがグランブルー

愛の深みで わたしも
グランブルーを見た
と、誰に言えばいい

地上の光は
生と死の闇には
届かないもの

ミントブルーローズ

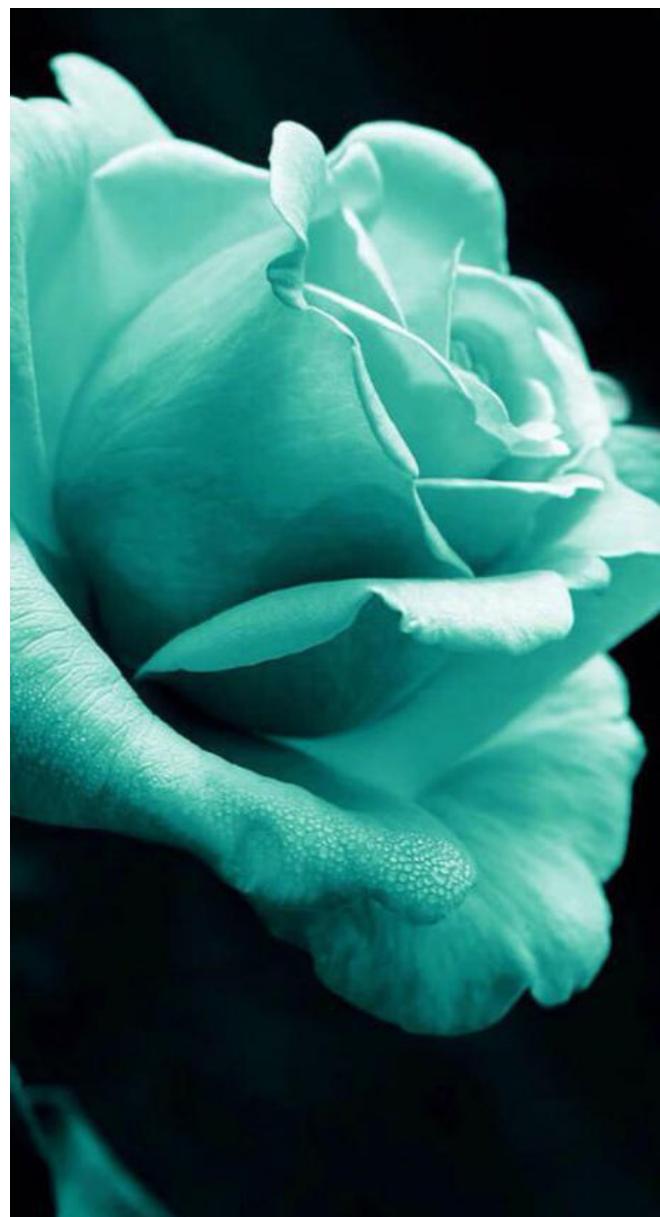
無いものをむなしく
探しているのではないですか

諦めと哀しみの青に
愛の紅を ほんの少し
垂らせて下さればいいのです

影のない優しい紫に
望の黄を ほんの少し
垂らせて下さればいいのです

その色水に
白薔薇を差してから
一晩置いてください

朝 そこにあるのは
あなたの探していた
ミントブルーローズです



金の蛇

尻尾を小枝に

三重も巻きつけて

腰から胴の

筋肉を目一杯に使って

胸をもたげ 首と顔を

すくと立てている

すべすべの金色の肌を

賢そうな目を

その神々しい色を

艶やかな光沢を

強欲な人間の目は

舐めるように見回し

信心深い人間は

自然に手を合わせる

金の蛇は 知らない

神に遣わされた使命を

地上には

苦しむ人が多すぎる

貧しい人々に
一縷の希望を与えよ、と



詩の蜜酒

北欧神話の女神フェイグ
その名にちなむフライデー
友—フレンド—もそうだ

神々の飲み物
詩の蜜酒を飲めば
誰しも詩人になれるという

そう言えば
友がヴァレリーの詩を
読んでくれた夜

ある酩酊感に襲われた
理性は何処かへ飛んでいき
時間もわたしも消えた

読んだあとに
こころが洗われて
善き人になれた

こころを共にし
一緒に苦しんだ
幸せになった

成らぬ恋を
瞬く間に輝かせ
実らせてくれた

ああ、詩の蜜酒よ
いまでも酔わないと
詩が書けない

美しい陰謀

能舞台の床下に甕がある

舞踊の足踏み音を

強く響かせる

ギリシャの劇場にも

これと同じように

反響させる甕があるという

なんと美しい陰謀だろう

もし人的心に

わたしの詩が響くなら

きっとそこに甕がある

これも美しい陰謀にちがいない

愛という甕は

神の手で埋められている

わたしたちの心に

楼蘭の砂を風が欲しがる

シルクロードをなぞるように
偏西風が東方へ長旅をする

ある遺跡では
埋葬された女王が
華美な思い出を語った

ある遺跡では
青々とした湖であったと
涸川一ワジーが泣いていた

峻険な靈峰を越え
大地に風は吹く

西域を出れば
もう砂ぼこりは舞わない
生ぬるい空気が殷んでいる

風は ふたたび
楼蘭の声を聞きたいと思った

聞き飽きないロマンがあった
あの楼蘭の砂が恋しいと
風は戻れない身を嘆くのだった

無言の賛歌

—ロン・ローゼンストックに捧ぐ—

彼の写真は大自然を見せてくれるばかりではない、その不死性とわれらの死を免れぬ運命も語ってくれる。写真には人が現れない。なぜだろう。

人間の歴史を考えてもみよ。我らの祖先は神を崇めながらも自然を都合よく変えて侵犯してきたのだ。そしてもうぎりぎりのところまで割り込んでいる。

わずか残された大自然のいくつかの場所、我らが写真家は一年を通して尋ね、後世に残していく。我らはその写真を鑑賞する幸運に出会う、遺跡では古代の声を聴きながら、北極圏の極寒の空気を感じながら、砂嵐の声を、無言の賛歌に感動しながら。

恋の化石

アンモライトは
這いする小さな石
と呼ばれる

古生代の生き物
その殻が化石となり
偶然オパール化したもの

有限のいのちが
不死の石となる
神の洒落た計らい

わたしの悲しい恋も
ことばの殻が守り
いつか遊色の光を帶びよ

※1 恐竜の歯やイカの甲羅、オーム貝などのアンモライトが知られる

※2 アーポアク 「小さな這いする石」

心の断面

ショーウィンドウに
灰色の石が飾ってあった
半分に切断されていた

断面を見て息を呑んだ
それは歪んだ年輪のよう
粗密ある美しい色重ねだった

青緑の階調の中
白濁も幾層があり
赤紫も幾筋かあった

いつまでも
見飽きない
そんな断面だった

さて
とぼとぼと道をゆくのは
初老の女流詩人

言葉の層は厚く
心うちに重ねられて
いるのだろう

わたしは
詩人の心の断面を
見届けた気がした



青鷺の旅

—アルメヌイ・シスヤンへ—

遥かな西方から
この極東の地まで
青い鷺が飛んできて
悲しい調べを歌つていった

涙の壺から
一滴もこぼさぬように
胸を膨らませて
愛の調べを歌つていった

哀しいことは
美しい
苦しいことは
喜びになる
と歌つていった

暖かくなり
西方へ帰る日がきた
首を振つて嫌がる青鷺を
発たせる日がきた

哀しげな
深い緑の瞳は
もう潤んできて
私を見つめるばかり

二度三度

羽ばたいた翼は
瞬く間に
春の空へ消えていった

愛の形象

こんなにも
静かに愛し合う
二人があつたとは—

言葉なく
闇に埋もれて
吐息も漏らさず

それぞれの
胸に秘められた
異なる愛の形象

何を惜しむらくか
自己愛に留め
自らを差し出さず

互いを招き入れず
愛の寛容以外は
何をも差し挟まない

封じられた
空間のなかでは
誰も介在しない

知らずともよい
決まりごとなどない
自由は自由を縛る

そこでは言葉が
シラブルの砂と化し
繋がることを拒絶する

聞かずともよい
愛に深さなどない
底は落ち続けている

そんな形象さえ
夢のなか
命を育てはじめる

わたしの声

生まれたとき

精一杯高く

泣いたわたし

校庭を

歓声をあげて

走り回ったわたし

大人になり知った

真剣に出す声は

空気を破ることを

大人になるほど

声は強く

低くなった

それでも

恋を語るとき

声は響かせない

熱い眼差しが

やさしい指先が

それに代わる

二人の間に

震わせる

空気の幅もない

愛は脆くはなかった
わたしの声は
思い出を語り出した

グランド・レター

それは両手に乗せた
手紙のことではない

その文章のことでも
余情のことでもない

消えていった
メールの文字でもない

街のカフェでの
幸せな時でもない

長く中断している
文通のことではない

それは 二つの魂が
一つに融けあつたこと

雑味を 濾過し
不実を 純化し

虚無を克服し
愛を信じたこと

そのすべてを
海綿のように含んだ詩

それが われらの

グランド・レター

青女の慰め

遠い 遠い人の
心を繋ぐことは

愚直な詩でしか
叶わなかつたが

ときおりは
長い中断があり

無色の歳月が
流れすぎた

それでも
詩人にだけは

雪を降らす青女が
慰めてくれた

優しく励まし
強く背を押し

遠い 遠い人に
詩を運んでくれた

青女よ 貴女こそ
恋の女神だった

大きい掟

— 愛には愛より大きい掟はない—ポエティウス

過ぎ越し方を

俯瞰する時が

いつかは来る

まだ今は

渦に逆らって

必死に泳いでいる

力を抜けば

水流の芯へ

吸い込まれる

あの愛を離れて

この愛に生きた

わたしだった

この愛を離れて

どの愛へ行ける

わたしにはできない

すべての愛を捨て

わたしだけを

求めてくれるひと

そんなひとは

望むべくもなく

愛の虚像に酔う

愛の掟は厳しい
さらに大きい愛で
報いなければならない

氷河

それが日々わずか前進していると
どうして信じられよう

海へ迫り出した氷山が
轟音を立てて崩れる

静寂がやってきて
海鳴りを黙らせる

氷河で裂かれた大地が
削りの痛みに堪えている

氷河に見える
黒い胡麻粒は人間だ

滑らぬよう恐る恐る歩き
写真を自撮りしている

氷河は緩やかに
自己を実現している

人間など意に介せず
きょうも0.6メートル前進をする

砂の滝

善心の甘露で

練らなかつたから

乾いた詩が

単節（シラブル）の砂粒となり

世間の風に吹き寄せられ

小高い丘となってしまった

時が満ちたようだ

その結果がこれだ

理想から 現実の
大きな落差に

ごう音もなく

飛沫（しぶき）もなく

真っ直ぐに

落ち続いている

縁起

誰もが 独立し
思うように生きる

そう思っているだけで
じつは 誰も独立できない

たとえば 家族も
友だち 同僚も

化合物のように
作用しあっている

人の気を発し
人の気を受け

修復したり
補強したり

その安定のうえに
わたしが存在している

貴方がいなければ
わたしでなくなる

わたしがいなければ
貴方でなくなる

テレポーテーション

詩の架け橋を渡り
テレポーテーションするとき

まずは愛しい人の元へ
黙って傍にいて驚かせたい

次に病に苦しむ友の元へ
そっと手を差し伸べたい

マリアサンブランノに
墓所に薔薇を供えたい

まだ見ぬネパールの友と
ヒマラヤを背に写真を撮りたい

アルメニアの友を訪ねて
こんなに染まった紅葉を届けたい

ローマの友を訪ねて
千句集を日本語で読んであげたい

ニューファウンドランド島の
ヴェールのマリアを見たい

マケドニアの詩のサークルで
朗読してみたい

まだまだ 書ききれない

瞬間が点となり線となる

深い心の友よ

わたしを作り上げた人びとよ

奇数の女

ルーレットが回り始める

軽やかな音を立てて玉は踊る
ギャラリーの凝視を一点に集めながら

すぐには止まらない

回っているあいだは賭けて良い
ルーレットは焦らせている

奇数だけに賭ける女がいる

もうすでに熱くなつて
シャンパンで喉を潤している

勝負を捌くのは

虚無のこころと
冷たい血をもつ女（ディーラー）

ようやく赤の3 4に玉は落ちた

無表情に黒いチップを
かき集めるその速さ

女同士の戦いがはじまる

奇数の女が 一段ギアを

上げたのを見逃さず

賑わうカジノの一卓で

丑三つ時のディーラーは目を

硝子のように尖らせた

虚ろな詩

懺悔するのは
虚ろな詩を綴ったこと

真実を云えぬから
詩を選んだはずなのに

さらに真実から離れ
いい加減に覆ってしまった

天然ダイヤには
二%の窒素が含まれるという

まだ誰も気付かない
詩に何かが足りないことを

詩の真贋は必ず
誰かに見抜かれる

虚ろな詩を書き慣れて
詩生を終えようか

この皮膚一枚の下
どこに魂があるのか

分からぬままに
今日も短い詩を綴る

黒い馬と白い馬

諸を疾走してくる

黒い馬と白い馬

神々しい艶肌

はがねの胸筋

野生の匂いが

人を蹴散らす

黒い馬は大草原へ

白い馬は水平線へ

大地を駆けるのか

天上へ翔るのか

砂を巻き上げる二頭の

いななきが交差する

詩曲一森

プロローグ

森に朝が来た

鳥が巣を出て

餌を探し回る

仲間に向ける

さえずりは高らか

幸せに目をつむる

その長いまつげ

森の春

水が動きだし

命が目を覚ます

木の芽が息吹き

木の根が伸びる

鳶が強く絡み

捕まえたら離さない

花が一斉に咲き

虫たちは忙しい

太陽の光が
まんべんなく差す

森の夏

濃い影の茂みに
時間が止まっている

苔の絨毯に
無数の露が光る

枝では極彩色の
鳥が羽を休める

人のいない森の
美しさはどうだ

入れば出られない
地図のない森

厳しくも優しい
序列と規律が

森の豊かを
守り続けている

森の秋

落ちる葉は落ちよ
枯れる枝は枯れよ

実が雨のように
降りしきっている

そのうえを
腐葉が被う

赤い葉っぱ
黄色い葉っぱ

絵書きが 筆を
何本も握りしめる

苔の緑は枯れ葉で
覆われてしまった

ずっと遠くで
鹿の鳴き声がする

森の冬

狼が息をしている
白い息をしている

まわりを黙らせる
息の音がする

蛙が眠っている
死を眠っている

全身霜がついて

目まで覆われている

みじんも動かず

冬を堪えている



エピローグ

森に夜が来た

ふくろうが欠伸し
目を全開にする

夜の獲物は鈍感だ
狙いを定め

ほうき星の速さで
向かっていく

心の包帯

わたしの詩は
あなたのお腹を
満たせないのです

あなたにとって
何の役も立たないし
値打ちのないものです

けれど
心の傷を覆い
なおるまで護れたら

無益な仕事でもなく
高尚な遊びではないと
明かされるのです

心の洞

恋が死んでも
生きられる

虚ろな世界でも
生きられる

愛さない自由と
愛されない自由がある

人は一人でも
生きられる

思い出は
誰も消せない

ここに来て
ようやく分かった

大切な人は心の奥
祠の中におはす

水中魔術館

水中花火

ある水槽では
花火は消えず
力強く燃えていた

魔術師は
白衣で口だけ笑い
自慢気だった

水中遊魚

ある水槽では
鯛と鯉が
一緒に泳いでいた

魔術師は
作業服の油ジミを
隠そうともしなかった

種明かしは
聞きたくない
不思議がいい

水槽が並ぶ
水中魔術館に
しばし遊んだ

水中自然館

水中花

藻草が
流れに身を
預けている
白い花が
光っている

水中雪

綿雪が
水中に降り
底に積もる
なぜだか
溶けない雪

水中滝

海の底も
陸地みたいに
山や谷がある
潮の満ち干に
滝が流れる

水中音楽会

水中音楽会

空気を震わす

音楽に酔い

生きてきた

水を震わす

音楽に酔いたい

水中雷鳴

海に落雷すれば

たちまち電流は

四方に広がる

つんざく雷鳴は

海の底へ向かう

水中考古館

水中破船

船は沈んでも船だ

見果てぬ航海を

続いている

時という

海を

水中遺跡

一夜で島は

海に沈下し

跡形もなくなった

石畳も 柱も

水中にある

水中祈念館

水中郵便

海の底にあるポストに
手紙を入れると
スタンプを押して
配達をしてくれる
地上のひとに

水中御像

海で戦死した
兵士の御靈を慰め
水中に
祈り続ける
キリスト像

天の川

空を大きく横切る

光の雲よ

大きな川よ

合うて 分かれて

また 合うて

どこへ流れしていく

ああ 手を伸ばすわたしが

いちばん近くにいると

言うておくれ

ここに小舟があると

あのひとがお待ちだと

言うておくれ

覚書

天の川の暗い部分をかたちに見立てていた古代人

逆転の発想が素晴らしい

入眠

神経を使い果たして
わたしの一日は終わる

目をつぶれば
先ず右腕が弛緩する

筋繊維が一筋ずつ
伸びていく

左腕が胸から
ずり落ちていく

次には足の筋肉が
伸びきっていく

背中が
鈍く痛む

タイプするよう
指がピクピクとして

わたしの意思から
からだが離れてゆく

裸電流の意識を
無理やり切ると

息を吐くたびに

眠りに落ちていく

嫉妬

—それはNYのデザイナーノーマの手作りだった—

はじめての贈物は 瑪瑙ブローチ

赤紫の濃淡は 夢の余韻のよう

小粒の瑪瑙と さざれ石が

心嬉しく 溢れていた

なぜか ブローチの美しさに嫉妬した日

次の年の贈り物は 色違いのブローチ

深碧の濃淡は 歪んだ年輪のよう

小粒の瑪瑙と さざれ石が

心乱れて 溢れてた

はたまた ノーマにまで嫉妬した日

瑪瑙は今もみずみずしい

わたしは鑄びているのに

ノスタルジア

生まれた土地に帰ると
一筆書きの絵を
完成させた気がする

あちこちに暮らし
そこから無数の旅に行き
見聞した他所の風景

それらと比べると
なんとつましい
静かな町並み

もう何もしなくていい
なぜなら十分に働き
ここへ戻って来たのだから

生まれて来た日
上唇で母の乳房を
探し当たた場所

確かなもの
生涯求め続けて
最後に戻り得た町

夢のなかで
誰も人は現れず
ほの暗い道を歩いた

一人帰還を祝せば
喜びの涙が
ノスタルジアを消していく
ひとつ またひとつ

サバンナの夜

草原では

動物たち同士

見事に棲み分ける

食べ溜めは

出来ないから

一匹だけ獲って食らう

面白半分に

生きているものは

一匹もいない

負けたら命はない

油断したものが

不運にも命をおとす

不意に来る

低空飛行の轟音

動物たちは逃げ惑う

どこまでも

どこまでも迫る

そんな人間が大嫌いだ

サバンナの夜は静か

人がいない

夜は静か

迷路

わざと迷わせるように
作ってある迷路

壁しか見えない蟻は
ぶつかって曲がり

曲がってはぶつかり
出口まで辿れそうにない

二階建に作ってあり
落ちる仕掛けまである

甘い香りの出口は
近づいたり 遠のいたり

楽しんでくれればいい
もしや 苦しみではないか

迷路を足している
陰湿な作者がいる

うたのふね

ぼくがのる このふねに
きみものる とおくゆく

あすからは ぼくだけを
みてくれる それだけを

きみまもる このきもち
いつまでも どこまでも

ひとはいざ ぼくらだけ
かみいます そらたかく

おもいだす きみのめは
まっすぐに ぼくみてた

おぼえてる ぼくのめは
きみだけを うつしてた

しあわせは ふたりぶね
うつくしい うたのふね

つきしづか このふねを
そっとだき あのしまへ

アズレウス -Azureocereus-

水をいっぱい ためこんで
青サボテンが 立ってます

尖ったトゲを あちこちに
向けて敵たち 脊かし

サボテンみたいな 女です
人に冷たい 女です

そんな女も 恋をして
トゲあることを知りました

血を流しても 抱こうと
命懸けの 男来て

透ける青さを 抱きしめて
素直に泣ける 日がきたら

干ばつの時 水吸って
生きられましょう この二人

青いサボテン 花つけて
今夜も 月に光ります

黒いアイリス

この黒い花びら
アイリスが真顔で訊く

神様 なぜ
わたしを黒にしたの

高貴なお方を
弔うため

植物ハンターを
誘惑するため

学者は切り刻んで
顕微鏡で見るの

詩人は空想を
欲しいまま

子どもは怖がり
逃げていき

恋人たち
目をつぶる

神様 なぜ花を
黒に染めたの

紫や 黄色の

従姉妹もいる中で

アイリスよ、と
神様が言い聞かせる

一人の詩人が
恋人へ花を贈った

「こんな黒から
光が生まれた

僕の今的心
きみがいれば

光が生まれる
星が生まれる」

そう書かせたのは
おまえの魅力だ

そして最愛の人へ
こう囁いた

「愛も 濃くなると
こんなになるのだよ」

黒いアイリスは
誇らしく思い始めた



默契

登山口はひっそりとあり
ためらう者は立ち止まる。

一步踏み入れば
もう戻れない一本道

少し登っていけば
道が分かれていた

道標には
右 愛の山 左 敬の山

わたしたちは
黙契のもと左へ進んだ

ふたたび
別れた道が一本となり

そして道が分かれた
右 愛の山 左 敬の山

なんと その山には
二つの頂があったのだ

稜線は美しく起伏し
左のほうが低かった

選ぶ機会は

二度あった

しかし黙契はひとつ
暗闇に光っていた

鉄の愛

三十路を過ぎ
わたしの青春も
翳りを見せていた

破れた袋に
水が溜まらないように
幸せに縁がなかった

そんなとき
ジョルジュ・ベルナノスの
「影の対話」を読んだ

そのなかの一行は
「男の愛は鉄のようだ
変わらない」
このことばは
いつしか心に住み着き
消えなかった

そして わたしは
ついに 鉄のような
愛というものを知った

錆びないで
わたしを見守る人
後ろ楯となる人がいる

鉄の愛は

わたしの魂に
育っている

春になれば

そこは 寂しい 寂しい所だろう
行けども 行けども 人気なく
木々すら 裸で立っている

そこは 寂しい 寂しい所だろう
雪が積もれば 動物も消え
曇り空の下に 無音の日々

道がなければ 地図にものらず
人家がなければ 灯りもない
そこは 寂しい 寂しい所だろう

猟師も 避けているのか
獲物を撃ち殺す音もしない
凍る湖を滑る者もいない

ただ 春になれば 花が咲く
蜜を吸いに 蜂が集まる
寂しいなかにも 訪れるものがある

小さな砦

毎日戦っている

夜中も戦っている

敵は小さなものから

大きなものまで

見えるもの

見えないもの

苦しめるもの

悲しませるもの

およそ不快なものを

弱体化させ

退散させるべく

戦っている

今でも

このことばで

戦っている

この戦いは終わらない

負ける訳には

いかなるからだ

味方はいない

たった一人の

戦いなのだ

心の弱さと

怠惰な隙をみせ

防御を緩くすれば

敵は総攻撃をかけてくる

微に入り 細を穿ち

自我という砦を建て

兵糧を蓄えて

決戦を迎える

敵はいつ

どのように来る

真夜中か

では寝るまい

走行中か

では出かけまい

内部にあるものか

では入れまい

白旗を上げるなら

最初から戦わない

勝つか 滅ぶか

今日も戦っている

いつか 聞こえる

敵が諦め

敗走していく

蹄の音が
大天使率いる
援軍が遠くより
土煙の中から
現れて来ている
いかに小さな砦でも
戦いは 決して
諦めてはならない

黄金の繭

黄金の光沢をした
繭が葉に下がっている
噂はすぐに広まる

きっと金の蝶が
生まれると信じて
待ち望む人の輪

がっかりさせては
いけないと
繭は羽化をためらう

できれば
みんなをがっかりと
させたくない

まるまる太った繭は
日に日にはちきれ
羽や足を縮めている

そろそろ
羽化が始める時
人々はレンズを向ける

金の蝶が 徐々に
羽を広げるところを
撮りたいものだと

その蝶は
脱皮に苦しみながら呟いた
「こんな羽でごめんなさい」

みなが心に描いていた
金の羽 金の手足
金の体ではなかった

カメラを閉じて
舌打ちをして 人々は
散り散りに去っていった

詩人がひとり
虹色の蝶に見とれて
微笑んで見つめていた



蘭の誇り

花が咲きおわり
香ることもせず
うなだれています

花びらの端が
茶色くなつて
縮んできました

摘花するに
ためらうのは
わたしだけだろう

そのうち
うてなが傷み
花ごと落ちる

蘭は実を結ばない
一輪の誇りを胸に
生き抜いている

香りの記憶を
心ある人に
刷り込んだと

わずかでも
幸福を
運んだと

そんな誇りが
笑みとなり
土に還る

桜の夜

桜の夜は眠らない

鴨川堤を 白く灯し
憶万という花びらが
さんざめいている

朝まで誰もいない
ひとりだけの花の宴
満月が照らしている

花と人との交歓は
美しい空間と
尊い時間

この桜も あの桜も
いまは わたしのもの
誰にも 触れさせない

一本ずつ
そっと抱きしめ
温めてあげよう

星雲の姿

ブラックホールの撮影に
成功したというニュース

わたしは、心の宇宙
恋という星雲を
漸く通過したところ

二十歳で入り
雲を存分に遊泳した
金の真砂の一粒

暗い部分もあった
薄い部分もあった
渦の中心は強く巻いていた

そこから
小さな星団が
生まれたりもした

離れるほどに
美しい星雲
その姿が見える

探査機が月面に
墜落したというニュース

白い本棚

好きな本を並べる
日射しを受けない壁に
わずかな本を並べる

古い本にはカバーをかけて
グラデーションのように並べる
こんな青春のような優しい夢を見た

そうだ
あまりにも暗いことを
考え続けて自らを沈めていた

花を持って
訪ねてくる人もない
ましてや扉での別れもない

白い本棚は詩人の書斎
ペガサスの羽を休める部屋
秘密が詰まった部屋

まず理想形を描き
そこへ向かうためには
どうしたらいい

白い本棚に
わたしが書いた
夢の書を並べるために

般若の面

嫉妬は女の顔を
かくも醜くする

男の愛が薄れゆき
別の女へ移って

男へではなく
その女への憎悪

ますます避ける
無情な男

般若の面は
内面を映す

もう戻らない愛
水に流れた過去よ

源氏の世から
今の世も変わらぬ話

だが
今は違う

愛さない自由も
あるわと宣う現代女

そんなことも

あつたかしらと涼しく

般若になるほど
愛せる男がいるかしら、と

可愛げも 愛しさも
般若の面の裏返しなら

今風の愛し方が
あっていい

なければ探して
さ迷えばいい

般若の面が
低い声で呻いている



禁断の愛

—少年たちも恋をする—

厳格な寮生活のなか
年上のナルチスと
快活なゴルトムントの
恋は静かに育まれる

天性の申し子
奔放なゴルトムント
長い睫毛を伏せる
恥じらいも愛らしく

知性の申し子
冷静なナルチス
物思いに沈む
横顔も美しく

僧院の回廊で
すれ違うとき
目が合い微笑む
それで十分な愛

ナルチスは悩み
苦しみはじめる
秘密の恋は
罪であること

この愛において
何を成就すればいい
膨らんだ思いに
破裂の時がくる

思いを告白する
ナルチスの頬に赤みが差す
「きみは少女を夢み、
ぼくは-----」と言ったとき

ゴルトムントを
汚すまいと観念し
ナルチスは青年へと
階段を一段昇った



幼きものに

十月十日
期待を一身に受け
きみは世に躍り出た

まだ湿っている
生まれたてのきみに
低い声で語りかける母

それからは
きみの一挙一動を
幸せが育てていく

きみに命をかけて
何らの悔いもなく
ただ満ちる喜び

愛ゆえに
背中に負う
苦労もいとわず

観音さまに
おすがりし
育てあげる

水の琴

手水鉢（ちょうづばち）で手を洗う
ただそれが音の始まり

そして 徐に
竹筒に耳を当てると

水の滴りが
竈の底を打ちはじめる

その音は
ひとつひとつ違って

絶妙に反響し
一曲を演ずる

高い音 低い音
伸びる音 短い音

重なり 途切れ
やがて 終止する

その曲は
たった一度きり

一期一会は
ここにもある

地中に 隠された

不思議な 水の琴

フラクタルの花

美しすぎる野菜

それは ロマネスコ

レース模様のつぼみ

色は 薄みどり

ふくらむセルが なぜか

すこし ゆずりあい

声をあらげて 先に

咲いた 塊が

危うく破れかけて

フラクタルになる

思いがけない模様

心 騒がせて

悲しい恋の日々は

こんな フラクタル



野生を忘れるな

アルタミラの
洞窟で暮らす
われらが始祖は

ことばを持たず
声音で 息遣いで
思いを伝えていた

獣肉の塊を
魚肉を肩に担ぎ
女の愛を求めた

美しい石や貝
花木を携えて
男の愛に応えた

そんな風に
粗野で強く
愛された者は

喜びを歌い
愛の成就を
周りに知らせた

ことばを多用し
レースのように
愛を編む現代人よ

野生を忘れるな

我らの始祖の

愛の嗅覚を

青琥珀

透明の貴石は
わたしの熱を奪い
得意げに光を遊ばせる

飴色の琥珀は
わたしの熱を奪わず
楚々と光を溜めている

無機なるもの
有機なるもの
肌は感じ取っている

ああ いきものは
何万年たっても
こんなに温かい

こんなにも
青く透き通り
愛が香っている

わたしの詩歌は
こころの琥珀
生きていた証

なぜなら
悲しみの源流に
たどり着いたから

そこでは
まだ渾々と
ことばが湧いていたから

綴る

砂漠では
蛇は横に走る
さそりは毒尾を立てる

乾いた暮らしでは
ことばが唸りをあげる
あなたの喉元を
狙い澄まして

愛しています
これだけが言えずに
わたしは綴る
修飾も過剰に

延々と書く
だんだんと
虚飾に溺れて
沈んでいく

あなたの心どころか
わたしの詩は一
思いにも追いつかない
熱く愛するために

冷ややかな愛

この世では
温かく愛する
互いの体熱を奪いながら

離れても なお
互いの心熱を奪いあう

来世では
冷たく愛する
持たぬ体熱さえ与えながら

離れても なお
互いの心熱を与える

消えた女

あの女は どこにいる
消息ないまま十年が過ぎ
細い糸を手繰り寄せて
こうして探しているのだが

もっと深い喜びが
あるはずなの、と
小波が引かぬうちに
去っていったあの女

言葉の海に 溺れて
自らを喪ったのか
繭を紡いでいるのか
つと息を消している

行方を知りたい
そう強く願うとき
きっと どこかの海で
女は 風と戯れている

風のように来て
風のように去り
美しい香りを残し
消え去った女だった

頷き

いつも傍にいる
その人を守るため
一生を貫いている

名を呼べば
名を呼びかえし
他人が入る隙もなく

他の人の
呼びかけも
耳には入らない

美しい頷き
間髪入れない
呼吸と眼差し

そんな二人に
羨みと 哀しみを
憶える人がいる

消えた的

文をつけた矢を

絞り 放った

びゅーん

きもちよく

唸りながら

弾道を描くと

あつ

的がない

外されている

もう遅い

矢はそのまま

突き進む

射抜く快樂も

当てた鬱れも

与えられずに

力はつきて

一矢の恨み

ボトリと墜ちる

散る桜に

あれだけ
待ったのに
まだ数日も経たないのに

もう 足早に
去ろうとしている
冷たい雨に散り急いで

ふと 思う
本当は早く散りたいのか
咲いたことで満足したのか

なぜ わたしと
もっと一緒にいて
春を喜ばないのだろうか

また すぐに来るよ
約束は確かだけれど
なぜか浮かないわたしの心

春が
わたしの期待を
すり抜けていく

あと
三百六十日を
待てばよいのだけれど

春の意思

銀杏の枝が
冬間に剪定され
幹だけの姿に

金の雨を降らせ
秋を染めた並木が
道路に寒々しい

わたしは
樹肌を撫でて
心配をする

大丈夫か
こんなになって
葉が繁るのか

目を凝らすと
若緑の芽が
いっぱい見えた

こんな硬い皮
突き破るには
凄い力が要ったろう

紗のヴェールを
一枚ずつ剥ぐように
強い歩みで春がくる

ためらう古木へ
芽吹きを促す
春の意思を見た

春霞み

遠景が いつも
ぼうっと霞んでいる
朝といわす
昼夜といわす

霞みが あたりを
覆いつくしている
からだが眠い
こころが怠い

春霞みに
ことばまで
眠気を 誘われて
緩みが 生じる

厳しい 冬を
越した疲れか
ことばまで
霞んでいる

焦点のない詩を
書き散らす午後

雪柳

お彼岸が過ぎた頃

もう寒くないと

桜のつぼみを

急がせるように

雪柳が咲きそろう

何千もの真っ白な花枝

そのなかに

薄桃色に咲く

ひとつの枝を見つけた

花に思いを寄せる

平穏な日がある

ささやかな楽しみが

わたしにはある



三日月の恋

双子も娘になれば
当たり前の恋をする
一人の男が現れる
その姉に惹かれゆく

冷たく 諦めを漂わせ
恋を駆け引きする姉

夏の宵 男は情熱の
やり場がなくなり
その妹に
姉を求めてしなう

禁忌と言えば禁忌
当然と言えば当然
姉の割りきれない悲しみ

三日月で裂かれた
双子の恋が息絶える

時の流れは

時の流れは

浅い川

わたしは

ふつうの小石です

さらさら さらさら

さらさら さらさら

水がわたしを

洗います

コロコロ コロコロ

コロコロ コロコロ

水がわたしを

転がします

まわりの石と

じやれあって

鮎のキッスに

身を反らせ

月夜にみなで

歌います

ひとりになると

淋しくて

わたしは

ふつうの小石です

鳥の歌

広々とした
板張りの間に
窓も 扉もない
風だけが吹き抜ける
涼しい昼下がりの時間

働くことは
無粋というのか
陰の一角で午睡する女
誰かが弦を張りはじめた
鳥の囀りが囀りを呼ぶ

この時間に
人はまんじりとも
動く気配がないのは
理にかなった知恵なのだ
まだ十分に時間はあるから

思えば あらゆるものは
熟すために 生まれ
死すために 熟すし
命を一度だけ 経験する

鳥の歌は
命のよろこびを
忘れた人に思い起こさせ
重ね合わせた 愛のことばが
夢ではないと 告げてくれる

こころの歌

こころ

こころ

こここころ

こころ

こころ

こここころ

こころ

ころころ

どこにある

こころ

こころ

こここころ

こころ

こころ

こここころ

こころ

どきどき

ここよここ

こころ

こころ

ここころ

こころ

こころ

ここころ

こころ

みせてよ

ここよここ

こころ

こころ

ここころ

こころ

こころ

ここころ

こころ

あまくて

ここよここ

花の歌

待った

待ったわ

一年も

あの丘

ぜんぶに

広がって

赤いろ

黄いろに

むらさきに

青ぞら

バックに

光ってた

わたしも

花に

なりました

ひとつが

しおれ

また次も

散った

散ったよ

夢みたい

わたしは
さびしく
なりました

金魚の祈り

暑い日も
寒い日も
やさしい声で
笑ったり

朝にはおはよう
夜にはおやすみ
云ってくださる母さまが
きょうは 泣いていらっしゃる

私たちも
悲しくて
しょげています
ごはんも食べたくありません

何もいわない母さまが
はやく笑ってくださるように
小さな胸ビレ 手を合わせ
お祈りしています

バッティラの夢

ポルトガルの小舟
バッティラが
船の周りを集散している

大航海の出航前に
積み荷は大量
食料、水、兵器まで

献上品に金銀
高貴なひとびと
司祭に 潽ぎ手に

あらゆるものは
バッティラで乗船する
出航するまでの花形だ

そんな見果てぬ夢も
今は昔 大阪名物
バッティラから始まる

バッティラ:ポルトガルの小舟

クレイジー・シューズ

もちろん 靴は歩きやすいのがいい
でも 見て楽しむ靴があってもいい

布でなくとも 革でなくとも
どんな材料でもいいじゃないか
足もとを飾り その働きを労り
その甲を包んでやってもいいじゃないか

未来の都市では たぶん
シューズコンテストが盛んで
奇抜さとクレイジーさを競うだろう

条件は五分間は立っていられること
べつに歩くことは求めない
もう創造力の力技が勝負だかた

次なるデザインの旗手はきみだ



ピジョン・ボックス

勤め先に
レターが来る
私情など挟まぬ
無味の印刷物

読み返さず
メモを取り
用済みの
ファイルへ

中には
心待ちにしている
手書きの手紙が
混じっている

毎日 毎日
山のよう
に
レターが来る
このピジョン・ボックス

ある日
わたしが転勤すれば
この箱は 直ちに
取り扱われる

すると
鳩は入れずに
ウロウロ ウロウロ

辺りをさ迷うだろう

入れぬ鳩は
赤いスタンプを押され
重たい翼で
戻っていくことだろう

宝物

ナイジェリアの

学校の建物が

突然崩壊した

百名の子供たち

いまも閉じ込められ

苦しんでいる

彼らの親が

胸をかきむしって

地面を叩いて叫んでいる

素手で瓦礫を

除けている

救助が来ている

学ぶ楽しさに

目を輝かせた

子供たちは

世界の宝物

ダイヤモンドや

金塊より大切なのに

天使たちよ

安らかに眠れ

そして・・・

天界の
丈夫な小学校で
授業の続きを

聖母の涙

一枚の写真が語っていた

ファッショショーン

光るランウェイ

真ん中で突っ伏す

白金色の短髪

青年のモデル

白い衣装に

黒靴の編紐が

痛々しい

後ろ姿も美しく

戻っていく

その途中に

突然崩折れる

動かぬ細い脚

壊れた心臓

光なんて嫌だ

美なんて嫌だ

金なんて嫌だ

衆目のなか

聖母はみ胸に

抱き取っていかれた

天の工房

天の川の
端のほうに
細流（せせらぎ）がある

あの日が
悪夢であればと
世界が悲しんだ

めったに泣かない
少年が我慢しきれず
目をこすったら

小さなメレダイヤが
指にくついた
何度も何度もこすった

いくつもの
メレダイヤが
手に残った

少女も同じだった
声を上げて泣き
たくさんこぼした

そのメレダイヤが
無垢の魂を飾り
天までお供をする

彼らは天の川の
細流のそばの
安全な工房で

ふたたび
残りの作画を
続けるだろう

夏の空
メレダイヤの
涙の川が光る

(2019.7.18
皆が救命を祈った夜に)

遁走

いつだったか
運搬中のトラックから
豚が何頭も路上へ落ちて

高速道路を
ひたすらに疾走するのを
テレビ画面で見た

青空の下
自由の風を受けて
興奮する豚達の遁走

養豚され
処理場へ行く迄の
幸せな時間

豚の魂が
青空へ向って
遁走していくのを

きのう
豚コレラの為
数千頭も処分された

わたしは
思わず
南無阿弥陀仏を唱える

悲しみのノスタルジア

改元だの

新札発行だの

五輪に 万博に

世の中を

推進する力が

強まっている

それでも

わたしは昭和が

しきりに懐かしい

カタカタ鳴る

足踏みミシンの

鉄の足台が

帰らない人々

苦汁を含んだ時が

手紙が

電話が

ファンションが

心の裏の裏を

読んだ恋の日々

悲しみも甘やかに

懐旧の念が

急に大きくなる

福紙

遠い昔のこと
母との暮らしあ
小さな幸福探し

ちり紙の端っこが
折れて重なっていたら
福紙を見つけたと喜んだ

暗くなるまで
外で遊んでいたら
よく大声で呼ばれたもの

「まりちゃん」
「まりこ～」
「まつりこお！！！」と

毎日が幸福探し
勉強もその一つ
母を喜ばせた

孫を持たせた
マンションに住まわせ
孫の成人式を見せた

それもこれも
福紙のおかげかも
しれんなあ

お母ちゃん一一

によおぜえ がーもん

お盆のスーパーは
お年寄りが張り切る

痛い膝をおして
曲がった腰を伸ばして
里帰りの嬉しさを
隠そうともしない

孫たちはカートに
くっついて離れない
レジは混みあい
赤ん坊がぐずり泣く

そんなな喧騒のなか
鮮魚コーナーに男児の声
未だまわらぬ舌で
繰り返し何か云っている

それが何なのか判り
わたしは目が覚めた
「によおぜえ がーもん
によおぜえ がーもん」

お父さんの読経を
覚えたのかもしれない
それでもちゃんと
如是我聞と聞こえる

五十年後の日本は
明るいと思えた日

ノスタルジー・ショップ

パリの蚤の市を真似て
四条のT百貨店が
「蚤の市」を開催していた

戦後昭和の女が
秘かに楽しむ
舶来品の手触り

吹き硝子の
大きな花瓶
カット硝子の水差し

亡母は戦前の
御影の暮らしの
幻を買い集めた

わたしも今でも
西洋骨董店にふらりと入る
思い出を呼吸するために

パピルエ・ファブリーク

今は桂川を臨む
高級マンションが並ぶ
その土地のこと

日本で初めての
洋紙工場が稼働して
書籍や新聞用紙を生産した

急速な近代化に
最も必要だったもの
それが印刷用紙だった

わが祖父は
洋紙会社の京都支店長
毎日が戦場だったという

紙を大切にせよ
粗末にしたら紙の橋を
わたるぞ、と娘を叱った

パピルエ・ファブリーク
今でも製紙機械の
音が聞こえるような—

パピルエ・ファブリーク：製紙工場

キベルネテス

いま最もトレンドな
サイバーテクニクス

ギリシャ語でキベルネテス
—舵をとるもの—が語源

しかし船は舵だけでは動かない
舵を切るのは進行方向だ

動力の加減や
海図の読みも

天気図や目視
船長の判断を待つ

操舵のものは
命令を遂行する

自動操舵には
底知れぬ恐怖がある

瑠璃の寺

思い立って

叡電に乗った

秋の装いでの外出

法悦の

瑠璃の光に

包まれたかった

薄い光は

十重二十重と

わたしの魂を

その実を

弱い殻を

温かい核を

護るように

照らしてくれる

救ってくれる

そう

思いたかった

苦し紛れだった

ひんやりした

森の空気が

甘く香る

清流に懸かる

橋を渡れば

すぐそこにある

瑠璃光院

八瀬にある

小さなお寺

望み

叶えられないから
望みといわれる

ショウウインドウの
光るダイアモンド

映画のなかの
豪華な暮らし

そんなのでなく
この儂しい暮らしで

もう少しなのに
手に出来ない望みが

今ではわたしを
追いつめてくる

米粒ほどが
どんどん成長する

皆にはあるのに
わたしだけにない

一体
それはどんなもの

かたちが

あるのかないのか

存在を
示するもの

時間であり
場所であり

契機であり
結果であり

糺余曲折あって
終には叶うのか

叶うものなら
もう叶っている

ひとの心を
操る術などない

叶うことのないもの
それが望みなのだ

あなたの景色

見せてください
あなたが苦節の果てに
見ることができた景色を

見せてください
あなたが登りつめた
そこからの景色を

見せてください
人々が小さく見える
そんな景色を

見せてください
ずっと胸にあった
わたくしの小さな影を

見せてください
わたくしだけに
あなたの景色を

花の真意

-行いが伴わなければ、語る言葉は美しく輝こうとも虚しくも香りなき花-

立ち止まって

垣根の山茶花を

愛でていたら

茂みの中には

ひとつの花が

隠れて咲いていた

わたしは

他の花を退けて

その花を見た

その慎ましい

花の心を

思って見た

どのように

どれくらい

だれに咲く

花の意思是

咲くことだけ

他にはなかった

有れば

それは人の心の

映り込みだった

エクフラシス

2019年の夏が過ぎていった
いや わたしが過ぎたのだろうか

去っていく寂しさに
過去へ戻れない現実を知る

今を生きるために
すべてを差し出した

もう何も残っていない
奪われるものもない

2019年の秋が来ている
いや わたしが向っている

入っていく無思慮と
未来に迎えられる幸福を知る

なによりも よいこと
誠実な人にめぐり合った

エクフラシスに表現し
誰よりも美しく生きたい

テクネ

人も草木といつしょ
いのちをいただき
大切にする

愛をもとめ
愛をささげ
人生を尽くす

かの人は云う
自然と向き合い
克服したのは人だ

テクネに胸を張る
智慧を伝授していく
そこまではいい——

いつのひか
テクネが人を
動かしはしないか

テクネが人を
滅ぼしてしまう
それを怖れる

細香の道

大垣より

彦根までは

徒ら歩き

北國街道

草鞋潰して

ひた歩き

彦根より

堅田までは

静か舟

堅田の湯屋に

身を預け

足を揉む

堅田より

大津までは

湖沿い

三井寺の

仏恩ありて

東海道

大津より

京までを

隔つ逢坂

情念は
一途に伸ぶ
辛さも喜び

三条大橋
檀王法林寺
抱きとりて

男女の道は
恋の道
終点はない

蘇鉄よ

台風中継に
荒々しい海岸が映る
なかでも蘇鉄は丈夫だ

どんな強風にも負けない
丈夫な幹を固い樹皮が守る
分厚い葉はすべて上を向いている

強い蘇鉄よ、汝は
南国への憧れを誘い
旅した思い出を誘う

何かを語っている
「ことばよりこころ
こころより行い」

まっすぐの木が
多く倒れても
負けず立つ蘇鉄

冬の花

その花は
深紅を誇っている

常緑の葉は
寒さを好むようだ

つぼみは膨らみ
次々に咲いてくる

ひとつの木に
狂うように咲く

しかし
よくみると

ひとつだけ
咲かぬ花がある

外側の厚い花弁が
緩まなければ

内側の花弁が
開かないのだった

半開きのまま
乾き出した花

神を信じて
身を預けて

枯れても
美しい花だった

土漠

白い雲が

青い空に

爆出する

鳥たちは

いたって自由

天敵もいない

サボテンの

実をつつき

甘い汁を吸う

木の芽を

ついばみ

逞しく生きる

日陰に

巣を作り

子を育てて

メキシコの

アカハ砂漠の

朝を歌う

転がる

干からびた

ラクダの頭骨

人も弱っては

地を這う動物

雨を待つ

小さな舟

この舟は
島と陸をつなぐ
唯一の方法

海の自転車
物資を積んで
往復をする

この舟だって
くたびれて
夜に思う

風まかせ
波まかせ
そんな夢を見る

小さな舟に
なんでもない
朝が来る

生きた曲線

平穏な日常に

突然舞い降りた

一つの曲線

その熱度は

上がりたり

下がったり

緩やかに

また性急に

動く

夢など

弾き飛ばす

今という時刻

無為は

狂おしさに

変容する

集中し

察し

決断する

ここまでか

ここからか

これしきか

必然か

偶然か

どちらでもないか

まさに

意思を持つ

ひとつの曲線

それは

右を向いて

動き止まらず

龍神のように

おおらかに

遊んでいる

ムスクの男

それは確か
ムスクだった

脳の芯を
痺れさせ

首や腕を
緩ませた

えもいわれぬ
好ましい香り

人混みで
それを感じると

思わず
振り返る

記憶の淀みに
網を打ち

思いつきり
手繰りよせて

面影を捕まえ
押さえたいが

逃れ上手な

ムスクの男だもの

忘れ下手な

無香の女だもの

上手くいくはず

ないじゃないの

哀れな猫

箱に閉じ込めた猫は
開けた時 生きているか

シュレジンガーの猫は
果たして どうだった

手品ではないから
消えることはないし

微量の放射線に
青酸ガスが装置され

確率的には
フィフティフィフティ

生きているか
死んでいるか

人であれ
猫であれ

思考実験といえども
おぞましい好奇心

そんなこと
どうだつていい

早く 早く
出してやつて

箱が大好きな
猫だったので

わたしは花

祈り終えた

両手をゆるめ

膨らませる

わたしは

花のつぼみ

こんな風に

咲こうとするのを

止めないで

きれいに咲こうと

深呼吸するけれど

少し息が苦しい

いのちの根は

水を吸い上げ

励ましを送る

中洲の人びと

川遊びをして

増水で動けない

じっと助けを待つ

どうにもならない

一そのように

知らぬまに

窮地に立つ

人びとがいる一

誰が見つけて

助けるのか

彼らの知恵と

幸運とがあれば

必ずや

不空絹索觀音様が

紐を垂らして

救い給ふ

するべきことは

すべて行い

信じて

待つ

夢の荒神口

ときどき夢は
古い映写機

モノクロで
霞んでいる

人はいない
音もしない

銀座屋の黒パン
厚く香ばしく

いちごかき氷と
大文字送り火

興華の中華そば
薄い焼豚を噛みしめ

お店のショウケース
草履や袋物が並ぶ

橋のたもとに
誰かが立っている

ああ こうして
ふるさとを喪しつつ

今は記憶の映写幕を

おぼろげに見る

ジーー

ジーー ジーー

雲中の鶴

雲中を飛行し

数ヶ月が経つ

どこまでも

視界が不良

鶴は明らかに

苛立っていた

そして おもむろに

長い首を上げた

すると グッと

雲海の上に出た

ああ 雲を抜けた

この心地好さよ

あなたへ

行かねばならない
真にそう思った
知らねばならない
強く思った

膝でにじり寄った
その場所は
遠くもあり
近くもあった

あなたが
いる場所
その空間に
入ってみたかった

どんな努力も
惜しまない
そう思えば
何でもできた

でも もう
頑張らない
喧騒の街
静寂の街

いつものように

イマージュのなか
二都物語を綴り
完成させよう

注:万里一空

七つの子

育つのも

早く

老いるのも

早い

鳥に生まれて

春を迎えるたび

恐ろしいほど

衰えていく

わたしは

母ガラス

七つの子は

立派に成長した

もう餌をとりに

いけないけれど

機嫌よく

暮らしている

あの子たちが

餌を運んでくれるから

毎日 交代で

そばにいてくれるから

注： 慈鳥反哺

月を盗る

空にある月は
ただ眺めるだけ

詩人は月を
我が物としたく

家の中庭に
浅い池を掘り

満月を映して
長い夜を過ごした

声の高い
婦女子を避け

がさつで
無粋な輩を避け

墨と筆を愛し
律詩を詠んだ

水に映る月は
男だけに侍り

心を通わせた

注:鏡花水月

泡消し遊び

違う世界を

覗いたら

一泡

二泡

違う言語で

話していく

三泡

四泡

成功とは

何なのか

五泡

六泡

虚虚

実実

七泡

八泡

正直者

恥を知る

九泡

十泡

泡消し遊び

面白かった

注：夢幻泡影

氷魚の物語

冬のびわ湖

浜の小石を

細波が洗う

波打ち際で

安眠した氷魚は

朝方 沖へ泳ぐ

朗らかな

子魚たちが

いっせいに泳ぐ

一番になりたくて

追いつきたくて

追いかけて

すると何かに

突き当たり

群れが曲がる

氷のような湖水

エリ漁の杭が

肩をいからせる

残雪の

比良連峰

草萌える刻々

氷魚は
行き止まりの
先端 (ツボ) へ

透けた魚体が
波の光と
交わる

あるものは
幸運にも
生き残り

ピチピチの
小鮎となる
若鮎となる

あるものは
不運にも
釜茹される

春が待たれる
びわ湖
氷魚の物語

注: 水魚之交

獅子舞

ギロリ ギロリ

大きな目が

睨み付ける

小山のような

大きな鼻が

息を吐く

フサフサ

頭の周りに

金色の毛

グイッと

前肢が

空を掻き

ドンドン

後肢が

地を踊る

ガバッと

大きな口が

噛みついて

ガチガチ

上下の歯が

鳴っている

悪を撃退
福を呼ぶ
獅子が舞う

注: 獅子奮迅

ハゲワシ

一成層圏

11278メートル—

そんな高い所から

何を狙っていたのだ

食べ尽くされた

骨だけの獲物か

気流に煽られ

上がってしまったか

何を探していたのだ

何から逃げていたのだ

肺を潰してまで

得た栄誉とは

アルプスの峰を

見下ろして飛ぶ

鳥瞰の美しさ

その虜となったのか

「最も高くまで飛んだ鳥」

ハゲワシよ きょうは

その頭に王冠をのせ

密やかに称えよう

注：37000フィート

樂屋裏

パリの小劇場

舞台が美しいほど

樂屋裏は雑然紛然

「わたしの勢いも

ここまで」と

女優が呟き

「そんなことは

ない」と

男が腰に手をまわす

どうにか

興行は終わり

脱力した樂屋裏

待ち構える

男の胸に

倒れ込み

「花束も

シャンパンも

いらない

静かな所に

連れていって

最後の夜だから」、と女

「任せておけ
明日から
楽をさせてやる」、と男

演じ
演じて
二十年

筋書きなしの
ドラマ始まる
楽屋裏

注: 雜然紛然

鉄の匂い

手を怪我し
唇で血を拭うと
鉄の匂いがした

柔かいからだの
すみずみまで
鉄がめぐっている

酸素を運んで
休みなく
めぐっている

鉄なんか
食べないのに
なぜだろう

鉄火巻き
食べたかも
知れないけど

光るウェブ

夜が明けると
大きなウェブが
ぎらりと光る

金色の網に
青い帯や紫
赤もみえる

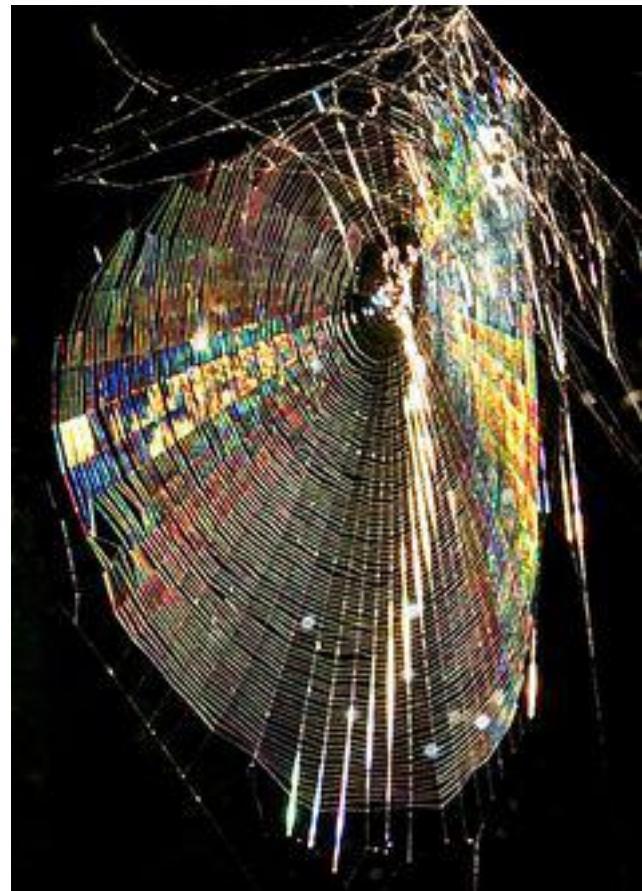
メタカラーは
滲み出た
命の燐

電腦のウェブも
こんな風に
なっているのか

結節が光り
集積帯では
熱を帯びるのか

心模様の
絡み合う
壮大なウェブ

収縮を
知らない
巨大な電網



堺堀

人と人の間は
どれほどか

実の距離で
測るのか

もはや 二人は
分かちがたい夫婦

心の距離で
測るのか

いまだ 二人は
一つになれない友

魂の距離で
測るのか

すでに 二人は
堺堀のなかに

注: 千里結言

ブックアート

いかに芸術が自由といえども
新奇を衒いたくても

本を素材に使ってはいけない
書物は聖なる魂の器だ

もしわたしの本が
一番下で見つければ

わたしは激しく泣き
引っ張りだすだろう

なぜなら 著者には
抵抗する権利がある

そうしてわたしの詩友も
続くだろう

知っている世界の詩友が
そうすれば

ブックアートといえども
一気に壊れていく

